もう戻れない君

春崎やよい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
もう戻れない君

【Ｎコード】
Ｎ５５６８Ｅ

【作者名】
春崎やよい

【あらすじ】
組織を倒したコナン。けれど、アポトキシンのデータはなくなっていて、もう戻ることが出来なくなってしまった。それを知ったコナンは・・・ジューンプライドの季節が終わる今日、から連載始まる！シリアスが苦手な人は、やめたほうがいいです。

一章

組織との対決でなくしたもの
工藤新一というもう一人の自分。
存在が大きすぎた・・・蘭に待っていてくれって言っていたにもかかわらず・・
ごめんとしかいいようがない。
そして、今まで一緒に過ごしてきた仲間。
帝丹高校のクラスメイト
けれど、もういられないんだよなそう思うと悲しいよ。最後にありがとうと言いたい。
そして、さようなら。もう、会うことがないな。

父さん、母さん。
工藤新一を生んでくれてありがとう。
けれど、これからは江戸川コナンとして二度目の人生を送ることにするよ。感謝しているんだぜ？
今まで、仲間というかけがえのない人がいなくて辛かった。
けれど、今は歩美・元太・光彦という友達ができた。あいつらと会って少年探偵団が立ち上がった。
ありがとうの言葉じゃ足りないくらいだ。

服部
お前と知り合えてよかったよ。最高の友達(ライバル)だよ。
けれ、これからは工藤じゃなく、コナンとしてみて欲しいんだ。もう、――――じゃいられなくなってしまったんだから・・・
感謝しているんだぜ？工藤といいそうになって誤魔化そうとしていたってこと・・

灰原
最初会った時、責めて悪かったな。灰原のせいじゃなかったよな、俺が悪かったんだから
俺が事件のことに首を突っ込まなければ良かったんだ。お前が正しかったよ。
いつ解毒剤が出来るのかと待ち遠しかった。けれど、結局無理だったもんな

もう、工藤新一という人物はこの世から死ぬんだから

一章（後書き）

今日でジューンプライドの季節が終わりますが、これからがコナンの新作が連載されると思っていてください。

大変お待たせいたしました。
もう戻れない君の連載始まりです！
いや～、大変お待たせいたしました。実は、明日から期末なのですがそんな前の日に投稿したいと思いましてしちゃいました。まあ、そんな作者ですが宜しくお願いしますね。
毎週この時間帯に連載しますので、お願いします！！

評価・感想・ダメだしお願いします！！
（質問・要望受けつますので！お願いします！！）

二章

工藤新一が消えてすぐに起こった事件――

蘭が自殺しようとした。

けれど、珍しく朝早く起きてきた小五郎に止められて死ぬことは出来なかった。

蘭を裏切ってしまったことは、謝る。

蘭をずっと新一に縛り付けていたんだから、隠し切れない真実。

朝ご飯を食べて、いつも通りに蘭と一緒に学校に登校した。

蘭は、園子に支えられて学校へ行った。

園子、感謝する。

もう、俺はいなくなったから言えることはない。

帝丹小学校へ登校して教室に来た。

歩美・元太・光彦が俺に気がつき「おはよう」「おはようございます」「おはよう！」と挨拶をしてきた。俺も挨拶を返す「おはよう」俺は、自分の席へ行き座る。隣に座っている人物に挨拶をした。

「おはよう」

「おはよう、くど・・・江戸川君」

灰原だ。工藤といいそうになって江戸川と直した。気遣っていることは良くわかった。

同情なんかいらないのに・・・

「江戸川君、気分でも悪いの？」

「違うよ。もう、元の姿に戻れないんだなって思って・・・」

なんで灰原に愚痴っているんだろうな？わけわかんねえ。でも、言いたかったことは確かだ。誰かに聞いてほしかった。まだ、可能性があるんだって心のどこかで思っているんだろうな。そんな自分が情けねえよ。元気なく笑った。

「ごめんなさいね。資料さえ手に入れば、あなたを元の姿に戻すことが出来るのに・・・」

灰原のせいじゃねえよ、俺の責任なんだ。そんな悲しそうな顔するなよ。

「灰原のせいじゃねえよ！俺が首を突っ込んだからよ」

「でも・・・」

灰原は、何かいいたそうな顔をしていた。俺の心の中を抉る。

「もうこの話終わりにしようぜ！先生がもうじき来る」

そう言って机の上でうつ伏せになった。

そこで話は中断された。

二章（後書き）

どうも、こんにちは。先週に引き続きです。
コナンが暗いです。そして、蘭が自殺をしようとしました。けれど、小五郎が発見したので、大事には至らなかった。けれど、ちょっぴり切ないです。
作者の私が言うのもなんですけど、今回の話は後から明るくなる傾向があります。（ダークにしたいのに・・・。）スルーしてください。
評価・感想待っています。
本日はこれにて。来週、会いましょう。

三章

一番辛いのは、彼なのにね。

私に一体何が出来る？

もう解毒剤が作れないなんて、彼に悪いこと

けれど、なんとかしてあげたいと思っているわ。

そこで灰原は、考えるのを中断した。いや、された。

「灰原さん、この問題の答えはなんですか？」

今は、算数の時間。問題は、至って簡単だった。

「（２９＋１２）４１」

「正解。じゃ、この問題を・・・江戸川君、解いてください！」

コナンは、授業をもはや聞いていない。上の空。

顔は、黒板を見つめたまま。コナンは、気がついていないのか、灰原がコナンの左肩をこづついた。

「（江戸川君！先生に当てられているわよ！）」

灰原は、小声でコナンに言った。

「はい・・・！５８です・・！」

コナンは、やっと気がついた。問題を見て、答えた。

全く何やっているのよ・・

灰原は、コナンの横顔を見ていた。そして、ため息をついた。

休み時間になり、コナンはいつもと同じように推理小説を読み始めた。
灰原は、歩美と一緒に図書室に行っていた。何か読みたい本があるらしい
「おーい、コナン！遊ぼうぜ！」
元太がコナンのところに来た。コナンは、読んでいた本を閉じて机にしまった。
「いや、いいよ。それより、話があるんだ」
その時、本を借りた哀と歩美が教室に戻ってきた。
「なんだ？コナン」
「相談でしたら、乗りますよ」
光彦が名乗りでた。
こいつらに本当のこと言っといたほうがいいかもしれないな
コナンは、授業中にずっと考えていた。
もう、工藤新一はこの世にいないわけ、そして、そのからくりをけれど、そんなことしたら本当に戻れなくなってしまう。
「江戸川君！きて！」
灰原は、何かを察知したのかコナンの右腕を引っ張って教室の外に連れ出した。そして、人がこないような場所に来た。
「江戸川君！あなた、何を考えているの？！まさか、あの子達に本当のこと言おうと考えていたんじゃないでしょうね？！」

なんだ、分かっているじゃないか。
「フッ。そうだよ、何もかも話して楽になりたい。そう思えたら楽だろう？なあ、灰原」
パアン！
灰原がコナンの頬を平手打ちした。灰原が違う手で覆っているのが、物語っていた。
「何考えているのよ！前までは、そんな人じゃなかったじゃない！」
哀から流れる涙が太陽の光で反射していて綺麗だった。
なんで泣くの？
どうしてそこまでして、言いたくないの？
なぜ、どうして？
コナンに分からないことだらけだった。
「灰原・・・、どうして泣いているんだ？何か悪いことでも、」
「あなたが泣かないなら、私が変わりに泣いてあげる！！」
哀は、コナンの言葉を塞ぎ強く抱きしめた。
そうか、これが彼女なりの優しさなのだ。コナンは、そう悟った。
コナンも哀を抱きしめ返した。
「ありがとう、哀」
そして、哀の右頬にキスをした。
目に涙を溜めて

三章（後書き）

こんにちは、春崎やよいです。
とうとう此処まで着ました。まだまだ、続きます。
来週お楽しみに！
評価・感想・ダメだしお願いします！！

四章

コナンは、隣に座って授業を受けている灰原を見た。
さっき、泣いていたのに今じゃ、いつもの灰原に戻っていた。
良かった
コナンは、安堵した。これからも灰原を守っていくと先ほど決めたのだから。
絶対に哀を悲しませるようなことはしない。

二時間目の四時間目の授業が終わり、給食になった。
準備が整るのを待っている時間、コナンは、哀に話しかけた。
「ごめん。弱気になって」
「・・・」
黙って聞いている。コナンは続ける。
「でも、もう平気だから。あんなこと、もういわないから」
「そう」
哀は、頷き給食をとりに並んだ。コナンも哀の後ろに立つ。
お盆に給食を乗せて、席に戻ってきた。
先生のいただきますの合図で、みんな給食を食べ始めた。

放課後になり、コナンたちは帰宅した。いつものように前に歩美・元太・光彦と並んで歩き、後ろにはコナンと哀が歩く。

分かれ道に入ると、歩美たちが後ろを向いて「じゃあね」と手を振った。
「じゃあな」
「気をつけて帰りなさいよ」

哀と二人になると、コナンが話し出した。
「今日、博士の家に泊まってもいいか？」
「あいにく博士は今、学会でいないわ」
「別に構わねえよ。」
「分かったわ。」
哀は、了解した。
「じゃあ、後でな」
コナンは、いつもの笑顔で毛利探偵事務所に入っていった。
哀は、コナンの後姿を見ていた。コナンの姿が見えなくなると、歩き出した。
（良かったわ。いつもの江戸川君ね）
哀は、喜んでいた。

四章（後書き）

今回、えらく分かりやいコナンでした。
評価・感想お願いします！！

五章

夜になる前、夕方にコナンが博士邸に荷物を持って入ってきた。
「いらっしゃい。いつもの部屋を使って頂戴」
哀は、コナンが着て言った。
「ああ、分かった」
コナンは、荷物を持って二階に上がっていった。コナンがいつも使う部屋に入り、荷物を置いた。
ベッドが置いてあるだけの空間。他には、何も置かれてなかった。
「このままってわけには、行かないよな？」
そう言って、ベッドにダイブした。
工藤新一は、もうこの世にはいない。みんな、死んだと思っている。クラスのみんなも、新一が帰ってくると信じていた蘭も。そして、母さん、父さん、服部。
「そうだ、服部に・・・」
言わなくちゃと思ったとき、下で話している声が聞こえてきた。
誰だと思い、部屋を出た。階段を下りて、リビングに行くとそこには、服部がいた。
哀と何か話しているようだ。
コナンは、そこから聞こえてくる会話を階段で聞いていた。身を屈めて
「どういうことなんや？！工藤、もう元に戻れないんか？！」
服部は、興奮して言った。哀は、それとは正反対に冷静に言った。
「ええ。アポトキシンのデータは、ないの。ジンが燃やしてしまって」
「でも、工藤は諦めてなんかいないんやろ！？」
コナンは、階段を降り始めた。わざと音を立てて
服部がそれに気がついて、階段の上を見た。コナンが降りてくるのを見た、服部はすぐさまコナンの元に駆け寄った。

「なあ！工藤、諦めんのか？」
服部は、真剣な目でコナンを見つめている。コナンは、フッと笑って
「ああ、諦めた。服部、新聞読んだだろう？もう、この世には工藤新一は存在しねえ。これからは、江戸川コナンとして生きていくって決めたんだ。もう、工藤って呼ぶな」
階段を降りきった。台所に向かう哀が階段の近くまで着た。
「コーヒー、持ってくるわね。服部君もいる？」
「お願い頼むわ、姉ちゃん」
「服部君、分かってないのね。工藤君が戻れないんだから、私だって戻れないのよ」
灰原は、そういって台所に入って行った。灰原が戻ってくるまで、服部はその場に固まっていた。
「（そうやな、何言っとんねん、俺。）ホンマ、馬鹿やわ」
ポツリと小さな声で言った。けれど、今の静けさじゃ服部の小声もコナンに聞こえていた。
けれど、それを無視をしていた。

五章（後書き）

こんにちは、春崎やよいです。
服部登場しました！大変な事態になってきました。
来週も読んでください！評価、感想。お願いします！

六章

台所でコーヒーを淹れて、リビングに戻ってきた。一つは、服部君にもう一つは、江戸川君に。
最後の一つは、私のよ。けれど、さっきから江戸川君と服部君は、黙ったきり。
私が少しの間いなかっただけで、こんなになるかしら？
私は、江戸川君に聞いてみた。そしたら、彼なんていったと思う？
「俺、服部にどんな顔して話せばいい？」
ですって。笑えてくるわ。
私は、江戸川君にこういってやったわ。
「自分のことは、自分で決めなさい。私がとやかくいう事ではないわ」
そう言って、私は地下室に入って行った。
後は、自分たちで何とかしなさい

◆◇◆◇

灰原がいなくなってリビングが一層静かになった。なんて、服部に言えばいいんだよ？
試行錯誤してみたが、無駄だった。そしたら、服部が
「ごめん」
と謝ってきた。
ああ、さっきのことだな
そのことは、すぐに分かった。俺は、服部に言った。
「気にしていない」
そこで、会話は途切れてしまった。

◆◇◆◇

俺、工藤に酷いことといってしもうた。
なんて、いえばええのか分からんかった。
でも、謝らないといけないと思ったから、咄嗟に「ごめん」という言葉は、すぐに出てきた。
けれど、その先なんていえばいいのかわからなかった。せやから、黙ってしもうた。
でも、そのあと工藤のほうから話し出してくれた。
「なあ、服部。俺さ、お前と会えて良かった。大切な仲間も出来たし、人との係わりを多く持っているんだ。蘭・おっちゃん・服部・和葉さん・歩美・元太・光彦、それに警察関係者。たくさんの人たちと一緒にいられて良かった。」
何がいいたんや？
「でもな、もういいんだって、最近思うようになってきたんだ。だ

から、もうそろそろ蘭の家を出ようと思っているんだ。」
「なんでや・・？何で、でるんや？」
俺は、素直な気持ちを言った。
けれど、工藤は
「蘭のところにいると、ダメになるんだ。今日の朝、蘭自殺しようとしてさ。見てられないんだ。」
俺は、このときようやくわかった気がしたんや。
工藤は、今の生活から抜け出したいんやと
「そのあと、どうするんだ？姉ちゃんところ、出たらどうするんき何や？」
「此処に移り住む。工藤邸は、近いうちに母さんたちがどうするって言っていた」
俺は、「そうか」としか頷くことしかできなかった。
もう、そこまで話が進んでいたんやな

六章（後書き）

〜〜皆さんにお知らせ！！〜〜

これからは、週二回に分けて、投稿することにします。本当にごめんなさい。時間に都合により、変更させていただきました。週二回の月木になります。これからも、宜しくお願いしますね！！

今回の評価または、感想お願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5568e/

もう戻れない君

2010年10月9日06時54分発行